

## 研究テーマ 生き生きと個が輝く学びの創造

～「言語活動」の充実を図り、思いや考えを豊かに表現し、伝え合う力を育てる～

北栄町立大栄小学校

### 1 はじめに

本校児童は、豊かな自然環境の中で育ち、素直で純朴であり、物事にまじめに取り組むというよさを持っている。子どもは本来自分の思いや願いを持ち、いきいきと自己を表現する存在である。しかし、近年の社会環境の変化に伴い、大人の価値観の多様化による規範意識の低下や自然・社会体験の不足による心の育ちが十分ではないという実態や、学習面における学ぶ意欲の低下傾向や自分の思いや考えを相手に伝える力が十分に身につけていない実態があり、本校児童も例外ではない。

そこで、このような状況の中で、子どもたちが21世紀を主体的に生きるために、課題を見だし、解決していく思考力・判断力・表現力を育てていく取り組みを進めていかなければならないと考える。

そのためには、本校児童にとっては、まず第一に、豊かな学びや体験を通して、言葉の力を大切に、「言語活動」を通して自己の思いや考えを表現できる児童を育成することが急務となっている。丁度時同じくして、このたび学習指導要領の改訂において、「言語活動の充実」が各教科等を貫く改善の重要な視点として掲げられた。そこで、このような背景も含め「言語活動の充実」を柱とし、思考力、判断力、表現力を育てるために授業改善を行うとともに、全教育活動において、「思いや考えを豊かに表現し、伝え合う力を育てる」ことを目指して、本研究主題を設定した。

### 2 研究の迫り方

- (1) 児童が習得した基礎的基本的な知識および技能を、学習において活用する力を養うために学習展開を工夫すること
- (2) 学習内容を自分の言葉で言語化して表現する活動を1時間のまとめとして取り組んでいくことにより、基礎・基本の定着を確実にしていくこと。
- (3) 主体的・意欲的に伝え合う力を育成するために、話し合いの形態を工夫し、コミュニケーションの場면을効果的にデザインすること。
- (4) 基礎・基本の力を養う朝読書・チャレンジ学習、昨年度作成した「向ヶ丘レインボープラン」を活かした家庭学習の定着化にも取り組み、保・中・高とも連携しながら、児童一人一人の学びの基礎作りの取り組みも継続的に努めていくこと。

### 3 スーパーバイザーの役割

年度始めの5月7日という時期に広島大学・角屋重樹教授を迎え 理論研修会を行うことで、研究の方向が明確になり、さらに深めていく視点を示唆していただいた。特に思考力、表現力を養うためにまず教師の発問を変えていくことの指摘は急務の課題となる。

#### <理論研修会で学んだこと>

言語活動の充実の目的についてお話しいただき、子どもたちの思考力・判断力・表現力を高めるために、どうしていけばいいのか指導を受けた。

## <指導内容>

- 学習習慣の定着させる意味・・・基礎的基本的な学習に継続的に取り組んでいく中で、「知っていく」「変わっていく」喜びを味わい、学ぶ自分、学習を続けていく自分に変容させてやること  
変わっていく自分を味わう「学び」を成立させてやる必要がある
- 言語活動は思考を伴うものでなければならない。論理的に考える・・・理由付けが一番の方法
- 思考力を鍛える・・・比べる、分類する、関係付ける学習を意識して
  - ・授業研究の視点として、比較場面を顕在化させる。(参観者が取り組める)
  - ・考える視点を与えることが思考を促す。そのためにはきめ細やかな支援や手続きが必要
- 表現する活動・・・体験活動したら書けるというものではない。どのような視点を与えるかが大切。  
感じ取らせる視点(スケール)を与えることを意識して。
- 仮説や見通しなど、ひとつの先入観を持つことが必要。→→→ 学習課題を明確に示すこと
- 自分の言葉でまとめる・・・自分の既存の知識で解釈すること
- 人から学ぶ姿勢を育てたい。人から学ぼうとする子は伸び続けることができる。同じ課題を考えていてもとらえ方が違う。それを伝え合うことで、個々の考えが発展する。

このあと研究推進部会で研究の視点内容などをもう一度検討し、研究の視点内容を練りあい研究の全体構想をたてた。そして、授業実践の研究の視点をさらに 4 つに絞った。

- ①言語活動を充実させることによって、基礎的基本的な知識および技能の活用を図る学習展開の工夫をする。
- ②「自分の考えや学んだことを自分なりの言葉でまとめる」活動を有効的に取り入れる。
- ③コミュニケーションをデザインする
- ④一人一人のよさを生かし、意欲的、主体的に学習していく子どもを育てる支援と評価の工夫

角屋教授の講義をとおして全職員が共通理解共通実践していく大きな力をいただいたように思う。



#### 4 研究の全体構想(内容)

学 校 教 育 目 標

◎黒ぼくの大地にたくましく生きる子どもの育成

め ざ す 子 ど も 像

○かしこい大栄の子 (知) ・学ぶ意欲 ・思考力・表現力 ・学び合う力  
 ○やさしい大栄の子 (徳) ・思いやり ・認め合い ・助け合い・ 励まし合い  
 ○たくましい大栄の子 (体) ・元気に楽しく・根気強さ ・健康 ・生活習慣

研 究 主 題

生き生きと個が輝く学びの創造

～ 「言語活動」の充実を図り、思いや考えを豊かに表現し、伝え合う力を育てる～

研究の仮説

1. 思考力、判断力、表現力を育む観点から、言語活動を積極的に取り入れた学習を重ねていくことによって、自分の思いや考えを豊かに表現する力が育つであろう。
2. 児童の思いや考えを言語で表現したり伝え合ったりする場面を工夫することにより、主体的・意欲的に伝え合う力（コミュニケーション能力）が育つであろう。
3. 保・小・中・高と連携を図り、幼児期から高等学校までの発達の段階を踏まえた教育実践を進めることによって、基本的な学習習慣が定着し、内発的に学びに向かう姿が育つであろう。

研 究 の 内 容

◎授業研究と実践（共通して授業改善に取り組む）

①言語活動を充実させることによって、基礎的基本的な知識および技能の活用を図る学習展開の工夫をする

言語活動 < 「言葉」で理解する >  
 < 「言葉」で思考する >  
 < 「言葉」で表現する >

- ・体験から感じ取ったことを表現する
- ・事実を正確に理解し伝達する
- ・概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ・情報を分析・評価し、論述する
- ・課題について、構想を立てて実践し、評価・改善する
- ・互いの考えを伝え合い、自らの考えを発展させる

②「自分の考えや学んだことを自分なりの言葉でまとめる」活動を有効的に取り入れる。

- ・自分なりの考えを自分の言葉で書く・話す
- ・自分の考えの根拠や理由を書く・話す
- ・言葉や文章だけでなく、図表やグラフ、描画など、さまざまな表現方法でまとめる
- ・学習の振り返りを書く・話す

③コミュニケーションをデザインする  
 （学習活動における言語活動を活性化し、子ども自らの解釈、イメージや考えを相互に伝え合う活動を重視する）

- ・ペア学習、グループ学習など学習形態の工夫
- ・見学や交流の場面の工夫

④一人一人のよさを生かし、意欲的、主体的に学習していく子どもを育てる支援と評価の工夫

◎漢字、音読、作文、計算など基礎基本的な学力をつける

- 朝読書、さらさら作文の充実
- 昼のチャレンジタイムの充実（音読集、マス計算、計算ドリルなど）

◎学習習慣の定着を図る（向ヶ丘レインボープラン・プチレインボープラン）

- 学びの基礎作り
- 学習規律の積み上げ
- 家庭学習の習慣化（家庭学習の手引き「自ら学ぶ」の活用）

人権教育・その他の教育活動  
教科指導・生徒指導

年間研究計画

地域行事・地域諸団体・PTA活動との連携  
保育所・中学校・高等学校との連携

学 年 ・ 学 級 の 充 実

## 5 研究のまとめ

### (1) 基礎的基本的な知識および技能の活用を図る学習展開の工夫

具体的な視点を与えることで、児童の学習が活性化した事例が増えてきているように思われる。理科では、予想を言う中で根拠を言わせるようにし、定着してきた。「なぜかという」と「わけは」などの言い方ができるようになっている。前時の結果と比較し、類推する力が少しずつ育ってきている。また、国語では、対立を仕組むことで、根拠の大切さを感じ、伝え合う学習になった実践や、メモにキーワードを挙げてスピーチにつなげる、「話すこと」の視点を明確にした取り組み、話項目や例などの話すヒントを示すことで、「いつ」「だれが」「どこで」等の要素を意識付けを図った取り組みなど、学習の視点を教師が意識し、「仕掛け」を行うことで学習が活性化している様子が見られた。



また、校外学習やG Tによる支援など、本物に触れることも、学習意欲の向上につながっている。教師の授業改善により児童の学びが活性化した事例がいくつも見られているが、児童の発表の力や思考力は向上し始めたばかりである。より多くの学習で視点を明確にし、児童の学びを活性化させる学習展開の工夫を積み重ねていく必要がある。

### (2) 「自分の考えや学んだことを自分なりの言葉でまとめる」活動

児童が自らの言葉で学習の要点をまとめたり説明したりする取り組みも、表現力の育成である。学習の中で、教師が要点を言い過ぎず、子どもが気づき表現したり、授業のまとめを児童自らの言葉で発表したり、高学年での学習のおわりに日直が学習のまとめを言うなどの実践を、全学年で意識し、共通の取り組みにしていきたい。

また、毎時間の学習のめあてと学習のまとめをノートに書くことも、児童が学習の要点を自らの言葉でまとめる大事な自己評価の取り組みなので、学習のきまりとして位置づけ、継続して取り組みたい。

### (3) コミュニケーションをデザインする

子どもたちが1時間のうちに発言する機会を保障することは、教師対児童の学習形態では、なかなか難しく、発言の機会に恵まれなかったり、積極的になれない児童の意欲を高めることができなかつたりしてしまいがちである。児童1人1人の思考を促し、そして表現し、伝え合う学習にしていくためにも学習の中に効果的なコミュニケーションの場を作ることが必要である。

今年度は、全学年でペア対話の時間を取り入れ、班での話し合いや全体での話し合い活動につなげていく取り組みを継続的に行うことができた。ペアでの伝え合いによって、意見を持っている児童はそれを伝えることで、自信のない児童は友だちの考えを聞くことで思考を深め、次の場面で意欲的に発表する姿が見られるようになった。

また、班での話し合いでは、話し合いを積極的にリードしようとする児童の姿が見られるようになった。一方で、友だちに発言や活動を任せてしまう児童も見られる。

ペアによっては、話し合いが成立しない組み合わせになる場合がある。考えを明らかにしてからペアでの話し合いに向かうことや、ペアでの話し合いに適した発問の内容を工夫していく必要がある。

## 6 おわりに

振り返っても、研究の見通しを持つ時期に角屋教授を招いての研修会がもてたことが1年間の指標となったように思う。今年度はその指標に照らした自分の実践を書き留めるという全職員による「研究実践集録」を作成した。何ができて何が足りないのか一人一人が自分を問う機会をもった。そこから見えてきたことを来年への課題としてつなげていきたい。